

企画事業

子どもを支援する青年ボランティア養成研修

事業の概要

事業のねらい 子どもたちの体験活動を支援するボランティアの養成をするために、ボランティア学習として必要な知識・技術の習得を図る。

期 日 平成22年5月1日(土)～5月3日(月) 2泊3日

会 場 国立那須甲子青少年自然の家

対 象 者 高校生・大学生・社会人(青少年教育施設等でボランティア活動を志す者、自然体験活動補助指導者を志す者及び教職員など、子どもたちと関わる職業を志す者)

参加者数 72名(30名)
(参加募集人数)

日 程

5月 1日 (土)	12:50 13:00 13:30 19:00						
			開 講 式	講義Ⅰ こんな活動し てます～自然 の家でのボラ ンティア活動	実習Ⅰ なすかしの森 を探検しよう	夕 食	講義Ⅱ 今求められる力 体験活動の必要 性

5月 2日 (日)	7:00 9:00 10:45 13:55 15:25 19:00						
	つ ど い	朝 食	講義Ⅲ ボランティア活 動の意義	実習Ⅱ 野外炊飯に挑 戦！	講義Ⅲ 今,求めら れている 力	実習Ⅲ キャンプファイ ヤーのスタンツ を考えよう	夕 食

5月 3日 (月)	7:00 9:00 13:00 14:10						
	つ ど い	朝 食	実習Ⅴ もしものとき の救命救 急法	昼 食	演習 まとめ	閉 講 式	

プログラム紹介



①【なすかしの森を探検しよう】
当所に生息する動植物の特徴について学んだ。



②【ボランティア活動の意義】
当所所長よりボランティア活の大切さや注意点などについて学んだ。



③【野外炊飯に挑戦】
カレーライス作りにチャレンジ。班ごとにおいしいカレーができあがり、大いに満足していた。



④【キャンプファイヤーのスタンツを考えよう】
スタンツの内容をグループで話し合い、実行するプログラムを体験した。



⑤【キャンプファイヤーの実際】
歌やゲーム、そして自分たちで考えた出しものを披露し合った。



⑥【もしものときの救命救急法】
白河消防署西郷分署員の指導のもと消防署認定「普通救命講習Ⅰ」カリキュラムに則して実施した。

- 企画・運営のポイント
- ①本研修をボランティア活動の入門編と考え、この後のステップアップのためボランティア研修を予定したり、OJTを通して自己成長したりできるような場を想定した。
 - ②グループワークの充実を図りコミュニケーション能力の向上が図れるよう配慮した。
- 事業を終えて
(成果と課題)
- ①ハイキングや植物観察等の森林での実地体験やグループワークにより意欲的に研修に取り組み、アンケートによる満足度は高いものとなった。
 - ②地元の高校や大学へ直接事業説明に出向いた結果、多くの参加者希望者を得ることができた。
 - ③法人ボランティアとして当所だけでなく他の国立青少年教育施設で活動できるよう情報を提供していく必要がある。

- 今後の方向性
- ①ただ参加するのではなく当所のボランティアとして活動できるよう当所の知識や技能などが習得できるよう今後もアクティビティーを設定していく。
 - ②大学生だけでなく地元の高校生にも積極的に声をかけ登録ボランティアの層を厚くしていく。

プログラム事例

キャンプファイヤースタンツ企画

プログラムのねらい

本研修の中で参加者としてキャンプファイヤーに参加するだけでなく、自分がボランティアスタッフの一人としてグループ活動の支援の方法等を理解するため、スタンツ計画、練習、実践までの流れを学ぶ。

展開例

①キャンプファイヤーについて講師をより学ぶ。



当所のプログラムで多くおこなわれるキャンプファイヤーについて、その歴史やその意義、一般的なプログラム、そして冬に行われるスノーファイヤーについて学んだ。また、対象者に適したプログラム(目的、人数、幼児、児童、学生、成人、時間等)について学んだ。さらに、安全確認のため、薪の組み方、点火の方法、キャンプファイヤーに適した服装についても学んだ。

②グループでの話し合い

実際のキャンプファイヤーを想定しそのプログラムの一つであるスタンツを考える。

対象は小学校5年生、参加人数は72名、時間は各グループ5分程度の出し物と設定した。



KJ法で思いついたスタンツの内容を付箋紙に記入していく。

各自が思いついた内容をそれぞれのカテゴリーにグループ分けしていく。

それぞれの考えを一つにまとめグループの出し物を決めていく。

③発表に向けてのスタンツ練習

グループごとに、話し合いをしながら練習するという熱心な姿勢が見られた。さらによりよいものにしようと、グループによっては休憩時間や夕食後の時間などに自主的に集まり練習する姿も見られた。



④スタンツ本番

緊張しながらもグループごとに楽しいスタンツを披露した。内容も、ただ見るだけ聞くだけでなく参加者も参加するような形態を取ることで、一体感が生まれ盛り上がりを見せた。



即興劇とクイズを組み合わせたスタンツ



参加者とのまねゲームをするスタンツ

プログラム効果

- ① 出し物を企画する際、KJ法を使ってまとめていく方法やリーダーが中心となり話し合いを進めていくことなど、実践を通して学ぶことができた。
- ② この研修後、当所主催事業等でボランティアとして積極的に関わっていく姿が見られた。
- ③ 今回の活動を通して、年齢も職業も異なる知らない者同士が、話し合いやスタンツ練習を通し、仲間としての意識が芽生え強い絆が生まれた。